

り

理不尽な 〈文言〉 代表 “主要教科”

Keyword : 教科目標, 3H美術教育, 5教科

「主要教科」という文言は外国にもあるのでしょうか。残念ながら我が国では“主要某新聞社”の記述等においてさえこの文言の出現は日常茶飯事です。のみならず私の周りの教育関係者でさえ平気で口にしています。見識を疑います。おそらく、5教科以外^{*1}の科目等は“学力外教科”なのです。でもほんとうにそうなのでしょうか。

“主要”でないとすればそんな教科がなぜ学校に在るのでしょうか。この「問」への「解」を私はもっています。ただ残念ながら現時点ではその私見に関するいわゆる科学的裏付けはありません。

しかし、明るい兆しはあります。「中学校学習指導要領（平成20年3月告示）^{*2}」の「第2章第6節／美術」における「第3 指導計画の作成と内容の取扱い／2 第2の内容の指導については、次の事項に配慮するものとする。／（1）各学年の「A表現」における指導に当たっては、生徒の学習経験や能力、発達特性等の実態を踏まえ、生徒が自分の表現意図に合う表現形式や技法、材料などを選択し創意工夫して表現できるように、次の事項に配慮すること。／ア 見る力や感じ取る力、考える力、描く力（※つくる力があれば万全／若元私見）などを育成するために、スケッチの学習を効果的に取り入れるようにすること。」との記述はうれしいことでした、

すなわちこの文脈には年来の私の主張「3H（Heart: 感じる力, Head: 考える力, Hand: みる・かく・つくる力）美術教育^{*3}」のキーワードが散見され、とりわけ「ア 見る力や感じ取る力、考える力」として人間力の基礎をなすかに言及、これらの力を獲得させるためには「スケッチの学習を取り入れるようにすること。」と「よいスケッチ」がゴールではないと読み取れる記述をしています。すなわち、美術教育が単なる「美術の教育」に陥ってはならないこと、同時に「美術による教育」を明快に示唆した文脈として、今回ばかりは積極的に支持したいと考えています。旧態依然たる我が国の美術教育のパラダイムの転換をさえ私は期待します。嶋本先生^{*4}、私は楽観的すぎますか。



*1 国語, 社会, 算数(数学)理科, 英語以外の教科

*2 文部科学省「中学校学習指導要領解説 美術編」, 日本文教出版, 2008.9.

*3 若元澄男編「図画工作・美術科重要用語300の基礎知識」, 明治図書, 2000.8

*4 前掲「は」の項